

平安京右京一条二坊七町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―三一

平安京右京一条二坊七町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京一条二坊七町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび共同住宅新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

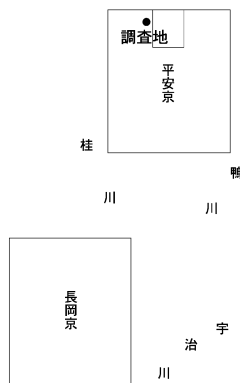
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京一条二坊七町跡
- 2 調査所在地 京都市上京区上ノ下立売通御前西入二丁目堀川町 517 番地
- 3 委 託 者 株式会社 プレサンスコーポレーション 代表取締役 山岸 忍
- 4 調査期間 2007 年 1 月 29 日～2007 年 2 月 23 日
- 5 調査面積 161 m²
- 6 調査担当者 吉村正親
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前につけた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 吉村正親
- 17 編集・調整 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

| | |
|--------------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| 2. 周辺部の調査 | 2 |
| 3. 遺 構 | 3 |
| (1) 基本層序 | 3 |
| (2) 第1面（江戸時代の遺構） | 3 |
| (3) 第2面（平安時代後期の遺構） | 8 |
| 4. 遺 物 | 9 |
| 5. ま と め | 11 |

図 版 目 次

| | | | |
|-----|----|---|------------|
| 図版1 | 遺構 | 1 | 第1面全景（北から） |
| | | 2 | 第2面南半（北から） |
| 図版2 | 遺物 | | 出土遺物 |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|--------------------|----|
| 図1 | 調査位置図（1：2,500） | 1 |
| 図2 | 調査前全景（南から） | 2 |
| 図3 | 作業風景（南から） | 2 |
| 図4 | 調査区配置図（1：500） | 2 |
| 図5 | 西壁・北壁断面図（1：100） | 4 |
| 図6 | 第1面平面図（1：100） | 5 |
| 図7 | 第2面平面図（1：100） | 6 |
| 図8 | 柵1、建物2・3実測図（1：100） | 7 |
| 図9 | 平安時代の遺物拓影・実測図（1：4） | 9 |
| 図10 | 江戸時代の遺物実測図（1：4） | 10 |

表 目 次

| | | |
|-----|-------------|----|
| 表 1 | 遺構概要表 | 3 |
| 表 2 | 遺物概要表 | 10 |

平安京右京一条二坊七町跡

1. 調査経過

この地は京都市上京区上ノ下立売通御前通西入二丁目堀川町 517 番地に所在し、当該地に共同住宅の建設が計画された。当地は平安京内にあたるため、京都市文化市民局文化財保護課によって試掘調査が実施され、遺構が確認された。その結果、建物範囲の南半部を調査対象とする指導がなされ、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当して実施することとなった。

当地は平安京の右京一条二坊七町にあたり、南を近衛大路、東を西鞠負小路、西を西堀川小路、北を鷹司小路で囲まれた町の南辺に位置する。町の内部を区分する四行八門制では東二行北七・八門にあたる。当町の居住者に関する資料は認められないが、『日本紀略』¹⁾天徳2年(958)4月14日条に焼亡との記事が見える。また、北の八町は隼人司所在地、南の六町は采女町であったと『拾芥抄』(西京図)²⁾には記されている。これらの史料からみて、当該地に平安時代の遺構が存在している可能性が高いと思われた。

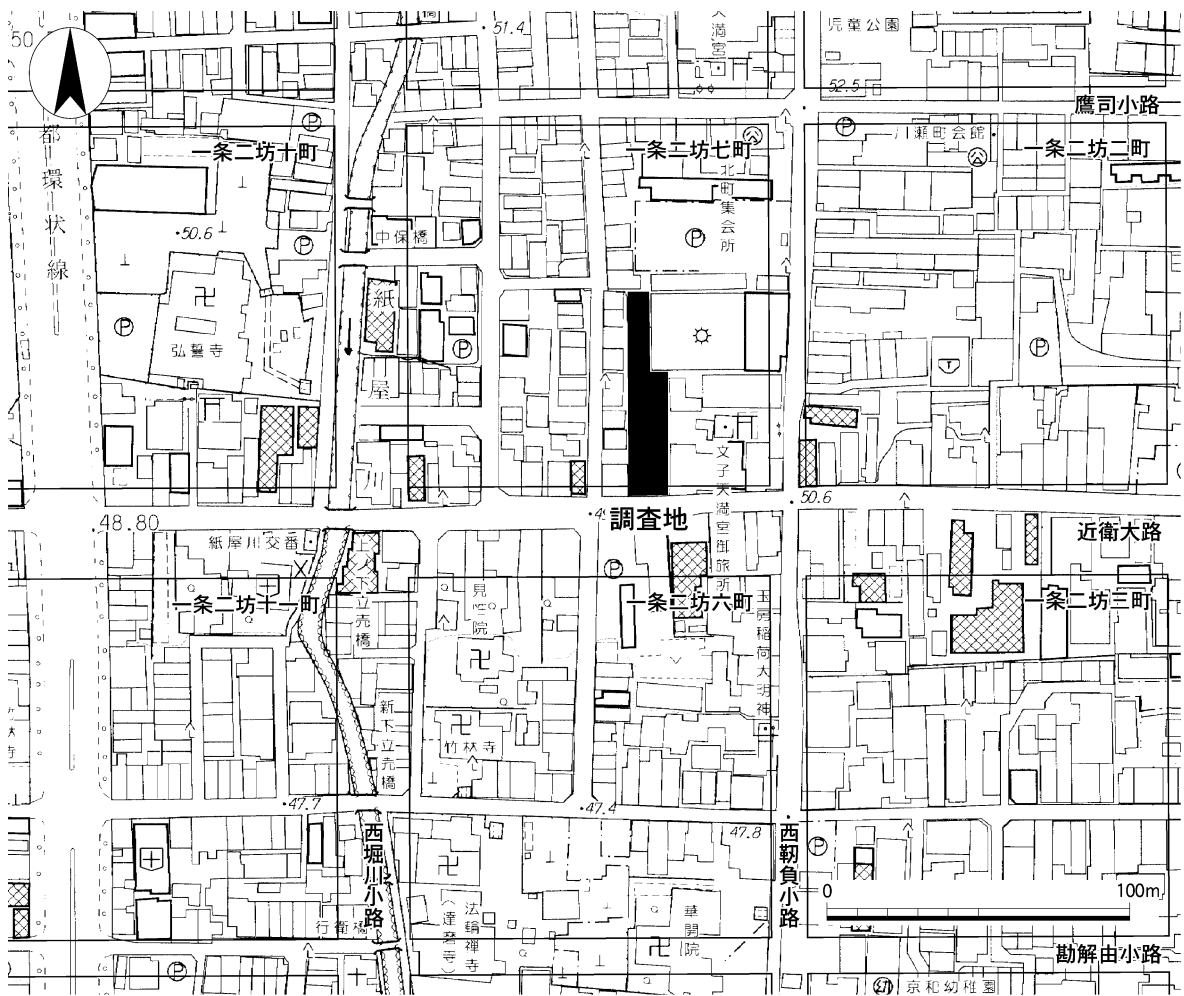


図1 調査位置図(1:2,500)



図2 調査前全景（南から）



図3 作業風景（南から）

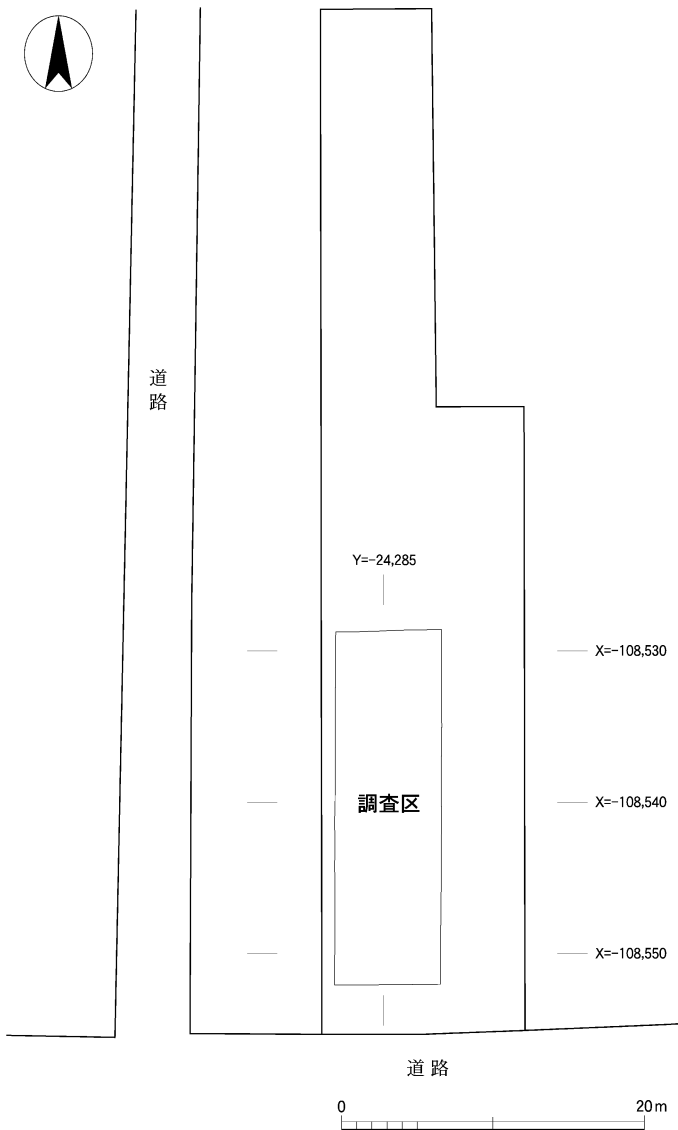


図4 調査区配置図（1：500）

調査は保護課の指導に従って、敷地の南部に東西7 m、南北23.5 mの調査区を設けて実施した。その結果、江戸時代と平安時代後期の遺構群を検出した。

2. 周辺部の調査

当該と周辺の調査例は、意外に乏しく、わずかに右京一条二坊二町（上ノ下立売通御前西入大宮町503）の立会調査において、地表下1 m余りで暗褐色粘質土層より平安時代中期の蔵手文軒平瓦（小野瓦窯産）と、平安時代後期の巴文軒丸瓦が出土している。また、北の八町域（隼人司推定地）で平安時代の包含層を確認している。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5)

調査区における基本層序は、全域に 0.5 m の盛土があり、次いで黒褐色砂泥層からなる江戸時代の整地層が 0.5 m 前後ある (層 2～5)。調査区の北部では、この整地層の下にさらに整層がなされている部分が認められる (層 6～8)。その下は全て地山層であるが、調査区北部では灰黄褐色砂礫層 (層 37) の上に褐色砂泥層 (層 33) が堆積しており、部分的に黒褐色砂泥層 (層 34) が認められる。一方、調査区南部では地山が流路状の堆積を示し、黄褐色砂泥層 (層 38) や褐色砂泥層 (層 40) などの砂泥層と浅黄色砂層 (層 41) などの砂層が互層となっている。

今回の調査では江戸時代の整地層を除去した地山層の上面で、江戸時代を中心とした遺構群と平安時代後期を中心とした遺構群を検出した。調査の都合上、江戸時代の遺構群を第 1 面、平安時代後期の遺構群を第 2 面として 2 回に分けて調査・記録を行った。

(2) 第 1 面 (江戸時代の遺構) (図 6、図版 1)

江戸時代の遺構は、上述のように江戸時代の整地層を除去した地山層の上面で検出した。しかしながら、調査区壁面の土層観察によれば、江戸時代の整地層の上面から成立するものと整地層の下で成立するものが認められる。後述する土壙 3 は江戸時代の整地層の上面から成立しており、その年代が 17 世紀後半であることから、整地は江戸時代でも比較的早くになされていたものと考えられる。以下、主な遺構について述べる。

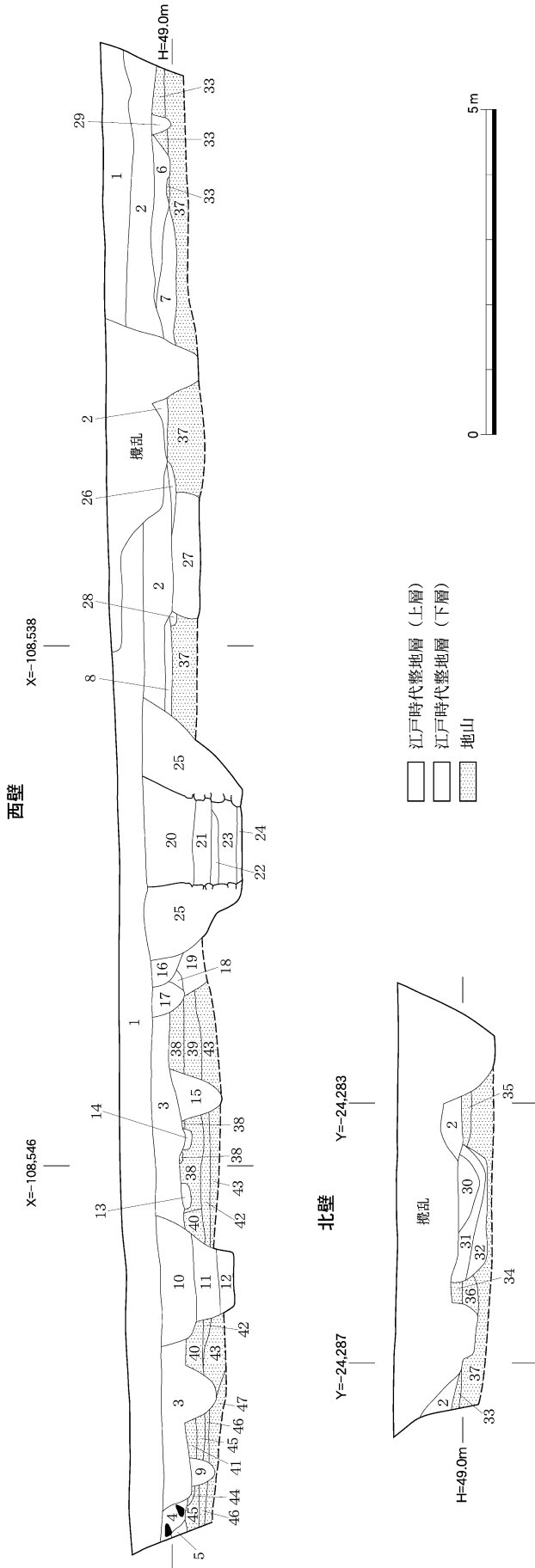
土壙 3 調査区中央西端で検出した石室 (いしむろ) と考える遺構である。室は方形を呈するものと考え、西部は調査区外となり確認できなかった。径 15～30 cm の礫を丁寧に積み上げた構造で、内法の南北幅 1.1 m、東西 2.5 m 以上、深さ 1.2 m を測る。埋土から 18 世紀前半の遺物が、石積の裏込からは 17 世紀後半代の遺物が出土している。

土壙 1・4・8・45・80・88・94 これらは、いわゆる土取り穴と思われるもので、地山である褐色砂泥層 (層 37) を採取した痕跡である。平面形は方形をしたものが多く、一辺が 1 m 前後のもの (土壙 4 など) から 3 m を越えるもの (土壙 80) などがある。調査区の壁面で土層の観察できる土壙 1・45 などでは江戸時代の整地層の下で成立しており、江戸時代前期のものと考えられる。

この他数基の Pit や土壙を検出しているが、建物などに復元できるものは認められない。

表 1 遺構概要表

| 時 代 | 遺 構 | 備 考 |
|--------|--|-------|
| 平安時代後期 | 柵 1、建物 2・3、溝 82、土壙 65・98、Pit 24・106 など | |
| 江戸時代 | 土壙 1・3・4・7～9・12・29・45・80・88・94 など | 3 は石室 |



- | | | | |
|----|----------------------------|----|------------------|
| 1 | 盛土 | 33 | 10YR4/6 褐色砂泥 |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 34 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 3 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土 | 35 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 4 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 36 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 5 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 | 37 | 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 38 | 10YR5/6 黄褐色砂泥 |
| 7 | 10YR2/1 黒色砂泥 | 39 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 8 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 40 | 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 9 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ10cm混礫 | 41 | 2.5Y7/4 浅黄色砂 |
| 10 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 (土礫42) | 42 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 |
| 11 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 (土礫42) | 43 | 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 12 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土礫42) | 44 | 10YR5/6 黄褐色砂泥 |
| 13 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 (Pt40) | 45 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 14 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 (Pt85) | 46 | 10YR8/4 浅黄褐色砂泥 |
| 15 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (Pt39) | 47 | 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| 16 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | | |
| 17 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | | |
| 18 | 10YR3/3 黄褐色砂泥、ブロック | | |
| 19 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | | |
| 20 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土礫3) | | |
| 21 | 10YR4/1 黒褐色砂泥、炭・土師器片 (土礫3) | | |
| 22 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭 (土礫3) | | |
| 23 | 10YR3/1 黒褐色粘質土 (土礫3) | | |
| 24 | 10YR3/1 黒褐色粘土 (土礫3) | | |
| 25 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、礫混 (土礫3 挿形) | | |
| 26 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 (土礫22) | | |
| 27 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土礫45) | | |
| 28 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (Pt37) | | |
| 29 | 10YR3/1 黒褐色砂泥 | | |
| 30 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (土礫1) | | |
| 31 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭・陶器片 (土礫1) | | |
| 32 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭 (土礫1) | | |

図5 西壁・北壁断面図 (1 : 100)

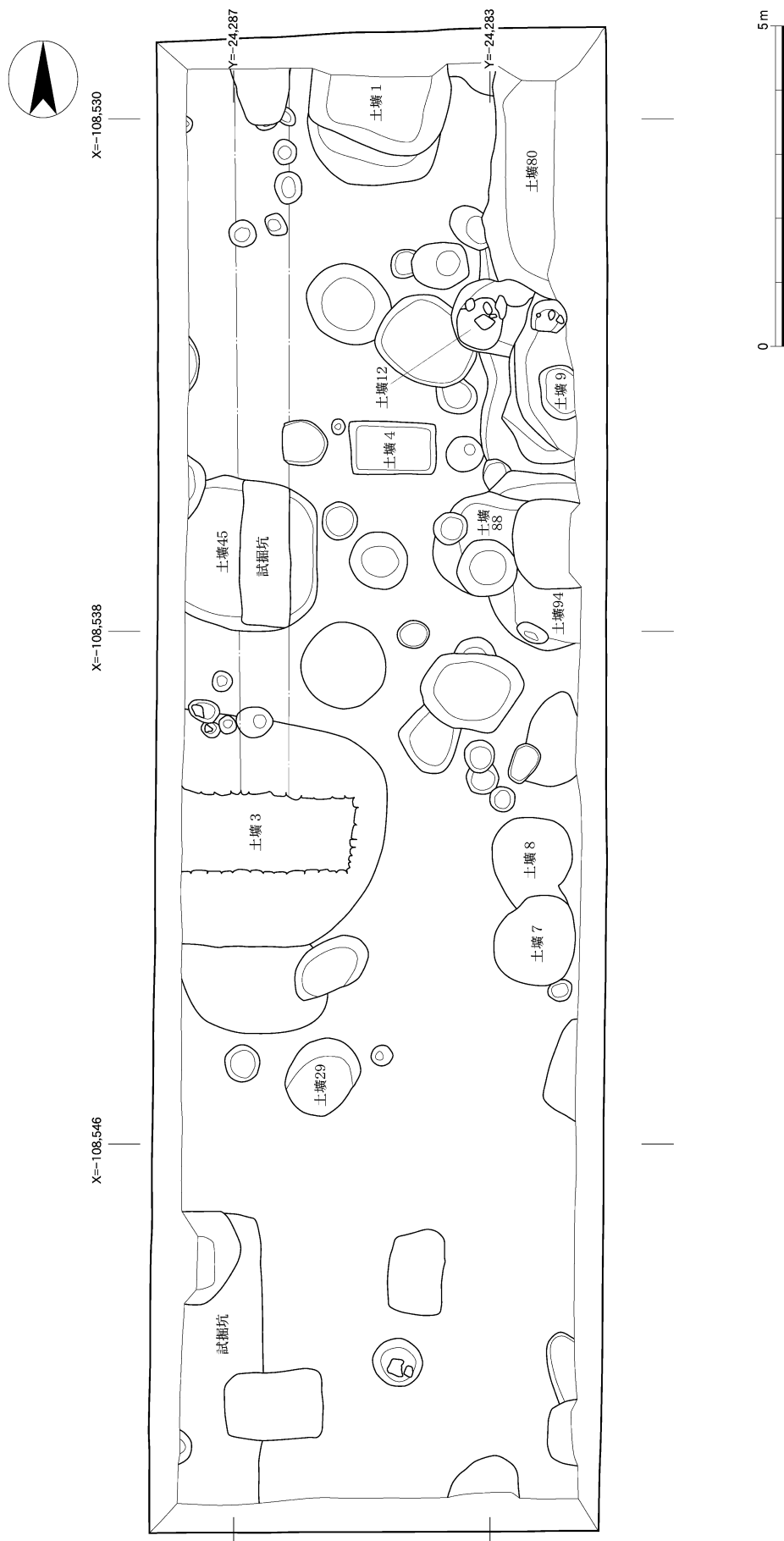


图6 第1面平面图 (1 : 100)

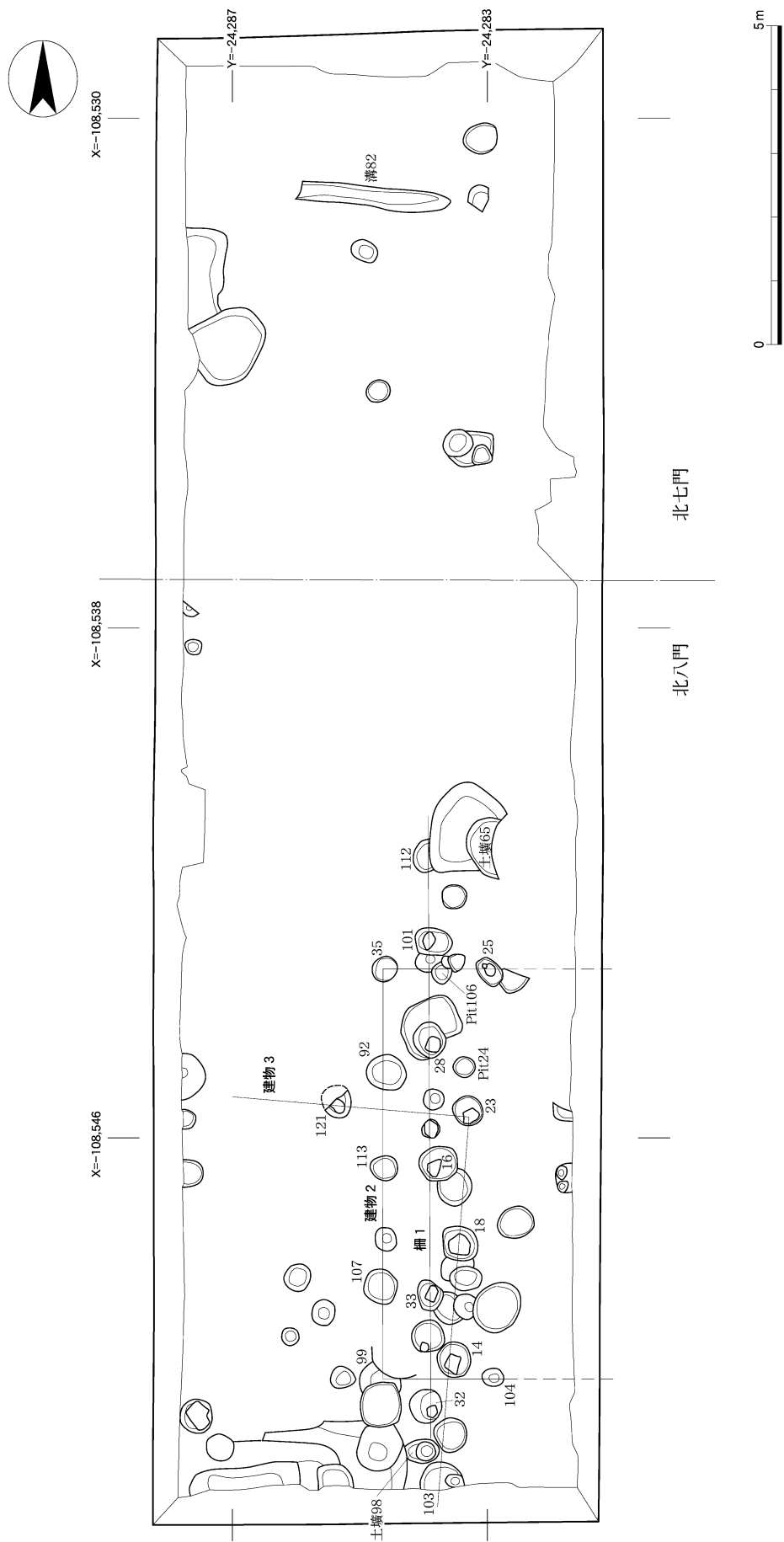
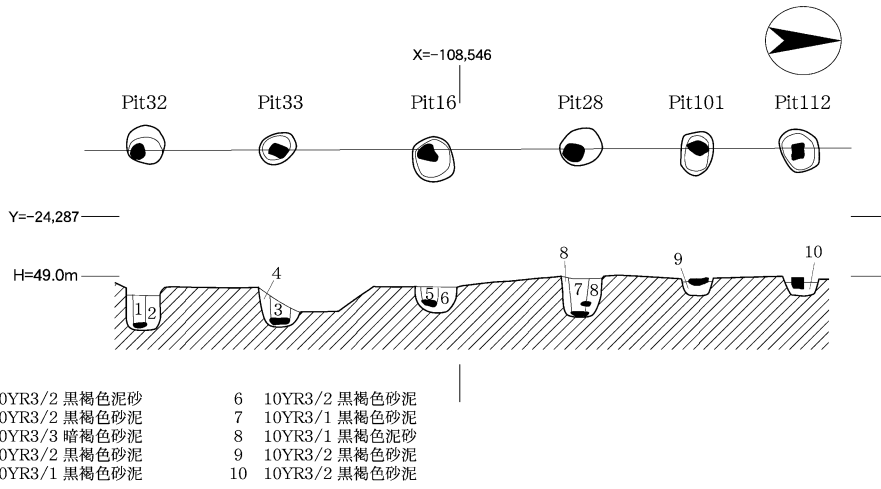
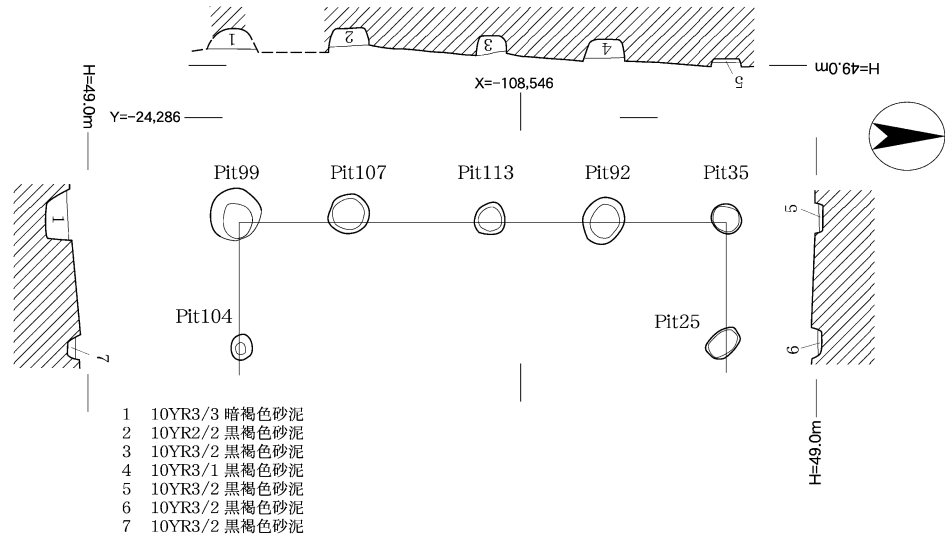


图7 第2面平面图 (1 : 100)

柵 1



建物 2



建物 3

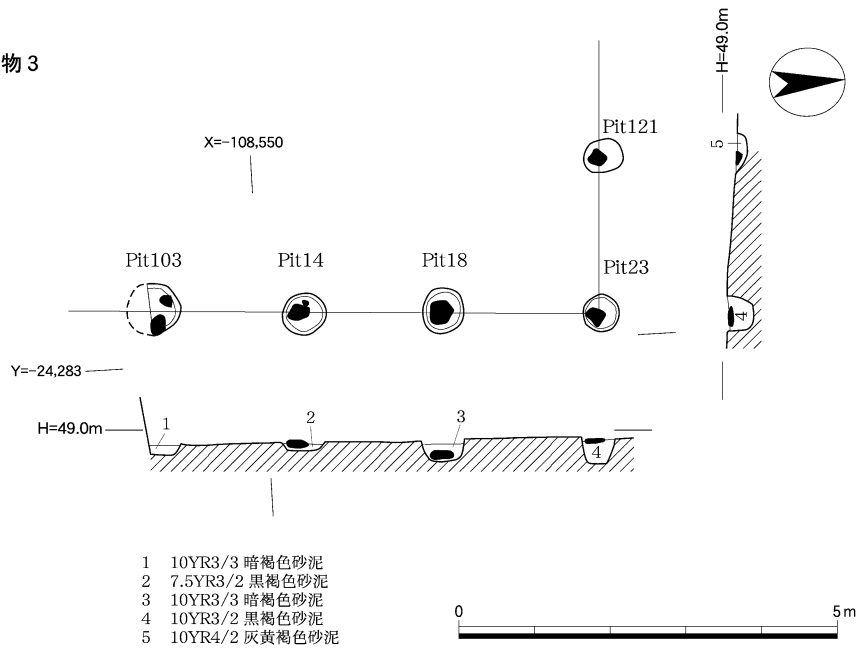


図8 柵 1、建物 2・3 実測図 (1 : 100)

(3) 第2面（平安時代後期の遺構）（図7、図版1）

第2面は平安時代後期の遺構群で、いずれも地山面で検出した。柱穴群が主で、調査区南部を中心に分布している。その中で、建物2棟および柵1条をまとめることができた。その他調査区北部で溝を1条検出している。以下、それぞれについて述べる。

柵1（図8） 建物とも考えられるが、南北方向の柱穴列に対して南北方向が確認できなかったため、柵として報告する。柱間1.3～2.0mで、南北5間分を確認した。柵の方位はほぼ真南北を向いている。柱穴掘形は径0.5m前後の円形で、径0.15m前後の柱痕跡が認められる。柱痕跡の下部にはいずれも上面が平らな礎石を据えている。柱穴からは12世紀代の土師器片が出土している。

建物2（図8） 南北4間、東西1間以上の掘立柱建物で、東側は調査区外に延びる。柱間は1.5～1.8mで、ややばらつきがある。柱穴掘形は直径0.4m前後の円形で、柱痕跡は不明瞭である。建物の方位はほぼ真南北である。

建物3（図8） 南北3間以上、東西2間以上の掘立柱建物である。柱間は2.0m前後で、柱穴掘形は0.5m前後の円形で、柱痕跡は不明瞭であるが、いずれも底部に平らな礎石を据えている。建物の方位は北に対して5°東に傾いている。

溝82 調査区北部で検出した東西方向の溝である。幅0.3m、深さ0.1mの素掘りの溝で、調査区の中央部から始まり西側は攪乱によって壊される。溝の方位は西に対して北側約5°傾く。この傾きは建物3と同様で、両者は時期的にも同じと考えられる。

4 遺物

遺物は整理箱で17箱出土した。出土遺物の大半は江戸時代の土器、陶磁器類である。平安時代のもは軒瓦、緑釉陶器椀、黒色土器、土師器皿の破片であった。いわゆる中世の遺物はほとんど無い。ここでは、平安時代の遺物から次いで江戸時代の遺物の順に解説したい。

平安時代の遺物（図9、図版2）

1は重画文軒平瓦で、土壙12から出土した。奈良時代後期の瓦で京外から搬入された物と思われる。焼成は非常に硬い。ただし近世遺物と共に出土した。

2は均整唐草文軒平瓦で、土壙94から出土した。平安時代前期の瓦で右半分のみ残っていた。近世遺物と共に出土した。

3は緑釉陶器小椀で、土壙98から土師器や黒色土器などと共に出土したが、平安時代後期の遺物も入っていた。時代は平安時代前期の軟質系の緑釉陶器である。

4は土師器皿で、口径15cmに復元できる破片である。大きめの皿と思われるものでPit24から出土した。12世紀中頃を想定でき平安時代後期にはいる。

5・6は土師器皿で、共に土壙65から出土した。5は口径8.4cmの土師器の小皿で浅黄橙色をしている。6は口径14cmを復元できる大きめの皿で12世紀中頃を考えている。

7は土師器皿で、Pit106から出土した。口径は13cmを復元できる。須恵器の破片と共に出土し12世紀中頃と思われる。

江戸時代の遺物（図10、図版2）

江戸時代の遺物は、土壙3でまとまって出土した物を中心に図示した。

上層から出土したのが8～12・14で、8は肥前染付椀で、14は京風肥前焼の椀である。12は内面に蛇ノ目の無釉帯を持つ白磁の皿である。9・10は土師器の小皿で、煤が付着しているのが灯明皿として使用された物と思われる。11は中くらいの皿で口径が10.4cmある。下層から出土したのは13・15～19である。13は肥前染付椀、15は唐津焼の皿で18世紀前半と考えている。16は煤の付着している土師器の小皿で、口径が5.6cmあり灯明皿と思われる。17～19は口径が

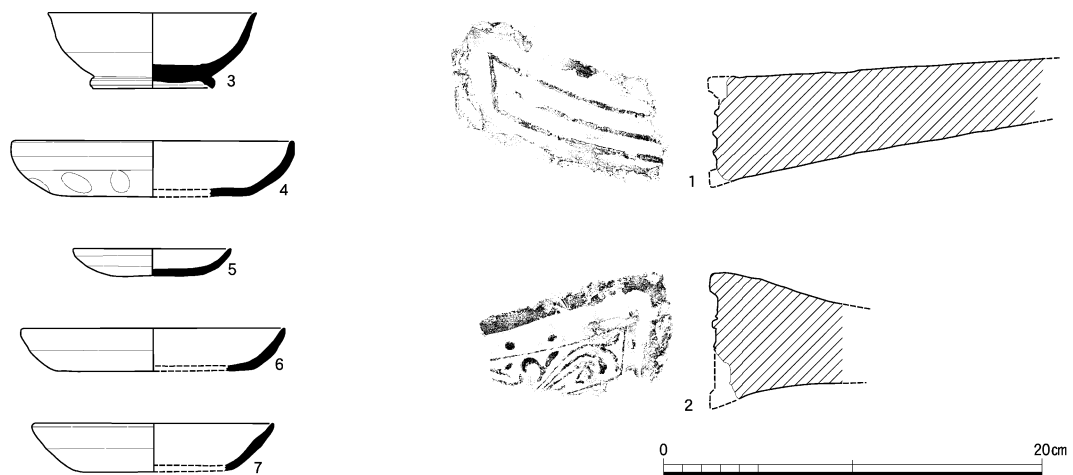


図9 平安時代の遺物拓影・実測図（1：4）

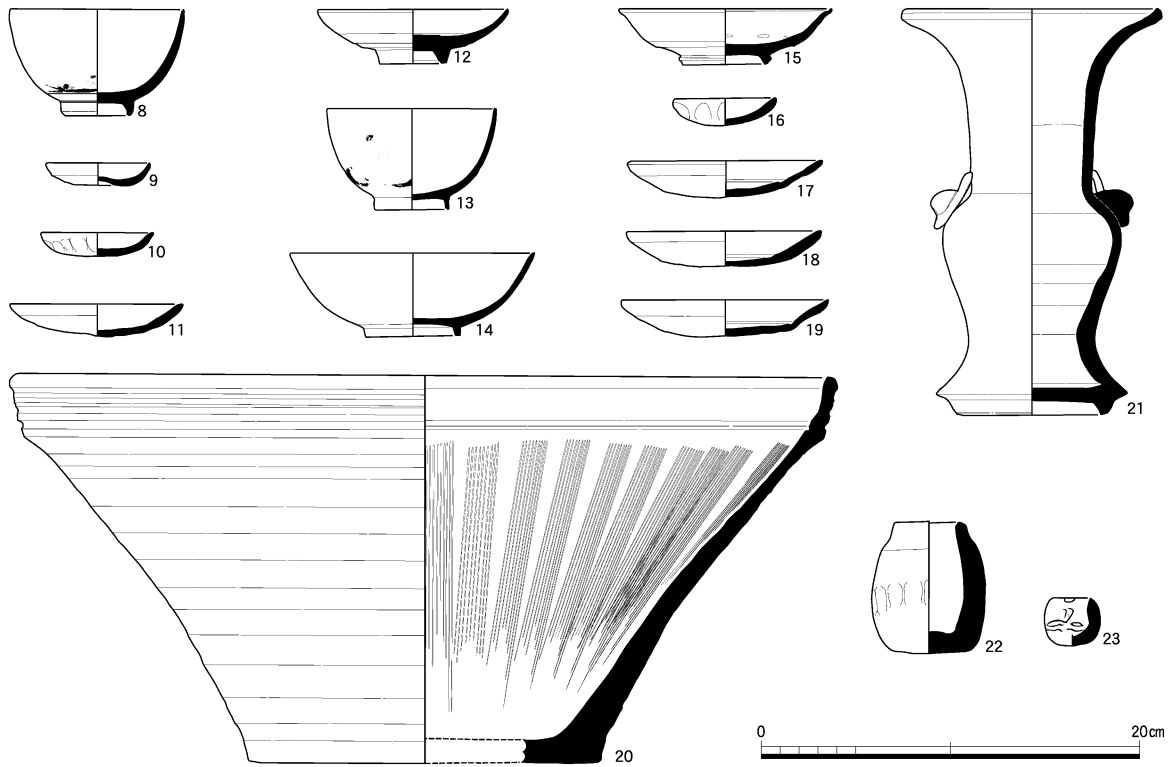


図10 江戸時代の遺物実測図（1：4）

10.5～11.0 cmのやや大きめの土師器の皿である。20は口径44 cm、高さ20.5 cmを復元できる信楽産の大きな擂鉢で内底部の使用が激しく櫛目条痕が完全に磨滅している。

21は耳付肥前青磁仏花瓶で、貫入が多い。土壌9から出土した。

22は塩壺で、18世紀前半の京都木野産である。土壌29から出土した。

23は天地逆にして顔が墨書されている土師器小壺である。土壌7から出土した。

表2 遺物概要表

| 時代 | 内容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|------|--------------------------|--------|------------------------------------|--------|--------|
| 奈良時代 | 軒平瓦 | | 軒平瓦1点 | | |
| 平安時代 | 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦 | | 土師器4点、緑釉陶器1点、軒平瓦1点 | | |
| 中世 | 土師器、瓦器 | | | | |
| 江戸時代 | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入染付 | | 土師器9点、焼締陶器1点、施釉陶器2点、染付2点、青磁1点、白磁1点 | | |
| 合計 | | 20箱 | 23点（2箱） | 1箱 | 17箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

5. ま と め

今回の調査では、江戸時代の遺構群と平安時代後期の遺構群を確認することができた。それぞれの時期ごとにその成果をまとめる。

江戸時代の遺構は、上述のごとく江戸時代の整地層の上面からの遺構と下面の遺構に分かれる。下面の遺構は土取り穴が主なもので、調査区に堆積する褐色砂泥層をねらって採取した痕跡である。こうした土取り穴が分布することは、当地が空閑地として存在していたことを示すと考えることができよう。整地層は上下で検出した遺構との関係から 17 世紀後半（江戸時代前期後半から中期初頭）のものと考えられる。また、整地層上面の遺構としては石室や土壙、柱穴などが認められる。今回建物としてまとめることはできなかったが、民家の建ち並ぶ状況が復元できる。

平安時代の遺構は、ほぼ後期のものである。遺構としては柵、掘立柱建物、溝などを検出したが、遺構の大半は調査区の南側に集中している。当地は平安京の条坊では右京一条二坊七町の東二行北七門と北八門にあたり、町の南側を走る近衛大路に近接した位置にあたる。今回は調査地の都合で近衛大路の北築地推定線の位置にわずかに達しておらず、築地やそれに伴う溝などを確認することができなかったが、検出した遺構からは大路に面して小規模な建物が軒を連ねていた状況を推測できる。これらの遺構には方位がほぼ南北のものとわずかに振れるものが存在し、若干の時期差を考えることができる。直接の重複関係が認められないことから、前後関係は不明であるが、他の遺構との関係から、やや振れを持つものが新しいと思われる。

また、今回の調査では中世の遺構が全く選出できなかった。遺物が出土せず、時期が確定できなかった遺構に中世のものが存在する可能性があるが、少数であることにかわりなからう。その原因については今後の課題として残っている。当地周辺は平安京の中においては調査例が希薄な地点であり、今後調査成果の蓄積を待って、考察を行う必要がある。

註

- 1) 新訂増補国史大系『日本紀略』1979年
- 2) 『拾芥抄』(西京図)改定増補故実叢書22巻 明治図書 1993年

版 图

報 告 書 抄 録

| ふりがな | へいあんきょううきょういちじょうにぼうななちょうあと | | | | | | | |
|--|---|--------|-------------------|----------------------------------|--------------------|-------------------------------|-------------------|--------------|
| 書名 | 平安京右京一条二坊七町跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2006-31 | | | | | | | |
| 編著者名 | 吉村正親 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2007年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| へいあんきょううきょう 平安京右京 いちじょうにぼう 一条二坊 ななちょうあと 七町跡 | きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 かみのしもたちうりどおり 上ノ下立売通 おんまえにしているにちょう 御前西入二丁 めほりかわちよう 目堀川町517 番地 | 26100 | | 35度 01分 17秒 | 135度 44分 02秒 | 2007年1月 31日～2007 年2月23日 | 161m ² | 共同住宅 新築工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 平安京右京 一条二坊 七町跡 | 都城跡 | 平安時代後期 | 柵、建物、溝、土 壙、Pit | 土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、瓦 | | | | |
| | | 江戸時代 | 土壙 | 土師器、焼締陶器、施 釉陶器、磁器、輸入染 付 | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-31
平安京右京一条二坊七町跡

発行日 2007年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961